

令和7年度 行政の諸課題解決のための大学生による多角的アプローチ事業  
「人口減少対策（特に若者・女性にも選ばれる地方になるための取組）」

## 高梁市・大学生インタビュー調査報告

山陽学園大学総合人間学部 ビジネス心理学科

1

## 背景と目的

**現状**  
大学という「装置」により、  
全国から若者が流入している。

**課題**  
4年間の「通過点」に留まっており、  
地域社会への定着に至っていない。

**本調査の視点**  
3名の学生への深掘りインタビューから、  
流入と定着の間の「溝」を可視化する。

2

## グループインタビューの概要

**開催日時**  
2026年2月24日（火）  
午後2時～午後3時30分

**対象者**  
吉備国際大学学生3名  
（学部生2名、大学院生1名）

**会場**  
吉備国際大学

3

## 結果



4

## 大学が作り出す「若者の居場所」

- 学びの満足度  
「専門知識がある人が多く、勉強が楽しい」「知らないことを知れる」。
- コミュニティの質  
「高校時代より世界が広がった」「考え方の似た友達と出会えた」。
- 結論  
大学は若者を惹きつけ、コミュニティを形成する「入口」として機能している。  
↪「大学に行くことが目標だった。入学後に将来を考え始めた」

5

## 「生活圏」としての高梁市の壁

- 機能的不足  
24時間営業の店がない、交通費が高い、洋服を買う場所がない。
- 住環境の拒絶反応  
虫の多さ（対策不能）。
- 回遊性の低さ  
車があったとしても「行く場所」が限られ、結局「家に引きこもる」か「市外へ出る」。

6

## 都会観と「高梁」の立ち位置

- 都会への冷めた視点  
「家賃が高く、人が冷たい」「何でもあるけど何にもない」。
- 地方に求める条件  
都会への盲目的な憧れはないが、「不便すぎない」「推し活ができる」ことが重要。  
↪「都会じゃなくても良いなと思った。でも、不自由しかないのは……」

7

## 【構造的課題】卒業＝脱出

- 定住を阻む決定打  
就職先の不足、生活利便性の「最低ライン」への未到達。  
↪「大学は好きだけど、（高梁に住むのは）うーん……」
- 行政への距離感  
活性化のアイデアはあっても「市は動いてくれなさそう」という思い込みと諦め。  
↪「企画しても市が動いてくれなさそう。バックアップがあれば案出しする」

8

## 新提案

### 若者の「熱量」を逃さない3つの施策

9

## 「推し活」のローカライズ

岡山＝桃だけでない、猫城主や歴史資産の聖地化  
『岡山』とひとくくりにして『桃』のイメージで売っている。  
高粱ならではのコラボがない。

10

## 「たまり場」の駅近集約

商業施設「ポルカ」の活用や、  
電車の待ち時間を過ごせる学生拠点の創出。  
大学の構内を出たら、学生がゆっくり時間を過ごせる場所がない。  
たまり場がない。

11

## 学生主導プロジェクトへの伴走

「まちが生きていない」という現状を、  
学生×企業のコラボで打破する予算と場の提供。  
学生の提案を行政がバックアップしてほしい

12



13

## 「大学がある」だけでは不十分

- 若者は高梁の「人の温かさ」を愛している。しかし、将来を託すには「機能」が足りない。
- 提言
  - 行政が「若者を支える」姿勢を具体的に（予算・場所・スピード感で）示すこと。
  - 「4年間のゲスト」を「街の作り手」に変えるための、実験的な場を商店街等に用意してはどうか。
  - 主体は若者、大人はそのバックアップ。

14